

愛媛新聞（2026年8月4日）に掲載されました。

福祉施設 生活用水不足続く

DMA T第1陣帰県 医師が被災地報告

済生会熊本病院内の活動拠点本部で情報
収集する松山赤十字病院のDMA Tら
11日、熊本市（松山赤十字病院提供）



最大震度7を観測した熊
本地震を受け、7月30日か
ら愛媛県の災害派遣医療チ
ーム（DMA T）の第1陣
として被災地に派遣されて
いた松山赤十字病院（松山

市文京町）のチームが3日
午前、帰県した。救急科副
部長の前川奈々医師（44）が
取材に応じ、福祉施設でも
断水で生活用水が不足して
いると現地の状況を報告。

南海トラフ巨大地震が懸念
される中、愛媛でも災害へ
の備えの充実を訴えた。

チームは7月31日から3
日間、熊本市の済生会熊本
病院内に設置された活動拠
点本部の運営を支援。被災
した介護福祉施設などのニ
ーズを調査し、物資などを
手配した。

前川医師によると、当初
は停電で冷房が使えず熱中
症になる高齢者が多かった
が、電気は早期に復旧した。
一方で断水は続き、飲料水
は備蓄や給水車などで確保
できているが、生活用水が
足りず、トイレ、風呂やシ
ヤワー、洗濯に困るとい
う声が多かったという。

現地スタッフは2016
年熊本地震の経験を踏まえ
て対応を検討していたと指
摘。「熊本の人は10年前を

教訓に生きてきた。自分た
ちの備えに足りない部分が
あるのではないかという戒
めになった」と述べ、南海
トラフ巨大地震などへの備
えの重要性を強調した。

共に第1陣として派遣さ
れた愛媛大、県立中央、市
立宇和島の3病院のチー
ムも、3日までに現地での活
動を終えた。第2陣として
被災地に向かった公立学校
共済組合四国中央、松山赤
十字、市立八幡浜総合の3
病院のチームは、25日
の日程で活動している。

（長谷川悠介）

掲載許可番号：d20260806-01